全学内部質保証委員会検証における意見への対応

部局等：工学部・工学研究科

評価結果における意見等 （※問題点や改善を要する事項、改善が望まれる事項等）	対応状況
大括りした学科のカリキュラムを見ると共通化した科目が見られるものの、旧学科をまたいだチームティーチングによる授業開催・卒業研究・修士論文の作成、教員の共同研等に関しては、改善の余地があるように思われる。DX化が進み多様化する超スマート社会においては、技術開発における学問分野を超えた協働はもとより、社会科学を取り入れた工学研究と工学教育の実現が必須となると思われる。ご検討をお願いしたい。	・工学部の学科大括り化の改組による教育の質の向上については、指摘された点だけでなく、より広い観点からの検証が必要である。在学生、卒業生、就職先企業などステークホルダーに対する意見聴取を行い、その結果を[redacted]活かすこととしたい。 ・学科や学部の壁を越えた共同研究を進展させるため、2022年度から研究推進課と連携して「連携促進プロジェクト」を開始した。このプロジェクトでは、新任の教員や昇格した教員が全工学部教員に対して研究内容を紹介し、その後研究推進課URAが紹介内容を基に連携先の教員や企業を紹介する。これにより、着実に共同研究の種ができはじめている。2022年度には14名の教員の研究紹介があり、４件の学内共同研究に結びついた。そのうちの１件は既に共著論文を発表しており、外部資金の獲得が期待できる。 ・社会科学を取り入れた工学研究と工学教育としては、これまで工学部・工学研究科と産学官連携本部が連携してMOTに係る教育研究を実施している。現在、急増する情報系人材への社会ニーズに対応することが急務となっており、情報分野の強化の一環として、情報技術へのニーズが高い社会科学の領域を工学研究・工学教育の中に新たに取り入れることができるかについては検討したい。
一部の学科で入試における競争率の長期的な低迷が続いている。学問分野でくくられた学科構成であると、従来の基盤的な学問分野に近い学科ほど、高校生にはその重要性が認識できないと思われる。基盤的な学問分野と時代に即応する技術開発のコラボレーションが顕在化して外部から見えるような工学部内教教分離システムが必要になりつつあるのではないか。現在の工学部・工学研究科人員構成にこだわることなく長期的な視点から組織の見直しを図っていただきたい。	長期的な競争率の低迷について次のような対策を施している。 1）2019年から副研究科長を主査とする入試WGを設置し、工学部入試委員会及び全学入試委員会に対して入試制度の変更を提案している。例えば、2020年よりWebオープンキャンパスを開催し、教員による工学部の説明や在学生による学生生活紹介を行い、遠方や事情で来られない学生・保護者に対して本学工学部を知ってもらう機会を提供している。また、本学工学部を志願する高校生（保護者、高校教員含む）を対象とした「高校生向けサイト」を新設し、2023年7月開設に向けて準備を進めている。 2）令和５年度入学生の志願倍率が顕著に低下したことを受けて、[redacted]調査[redacted]した。その結果、特に東海地方からの志願者の激減は、上位と下位レベルの志願者がともに減少したのが理由であることがわかった。[redacted] 3）2）の原因について、上位・下位レベルの受験生に対して種々の対策を継続する。[redacted] 4）2023年7月に副研究科長を主査とする工学部改組WGを設置して[redacted]議論を始める。 それに先立って、「成長分野をけん引する大学・高専の機能強化に向けた基金による継続的支援」に申請し、情報系分野の博士前期課程の募集人数を30名増員した。今後、左の指摘のように、情報系分野を含めて「基盤的な学問分野と時代に即応する技術開発のコラボレーションが顕在化して外部から見える」方向[redacted]である。